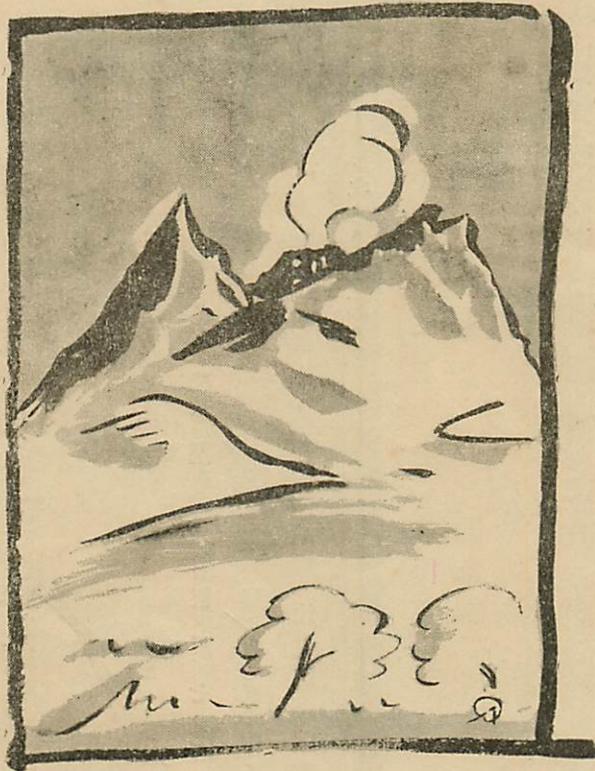


山とスキー

第八十二號



札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和三年五月廿八日印刷納本

昭和三年六月一日發行
(毎月一回
一日發行)

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次 目 號 二 十 八 第



記 事

九重火山群の植物景觀概要

竹 内 亮

〔一〕

第二回國際オリンピックスキージャンプ競技(續)

伴 素 彦

〔二〕

オリンピックのスキージャンプ競技を観る

廣 田 戸 七 郎

〔三〕

北海道の春

伊 藤 秀 五 郎

〔四〕

山 詩 抄

和 辻 廣 樹

〔五〕

第十六シーズン北大スキー部々報

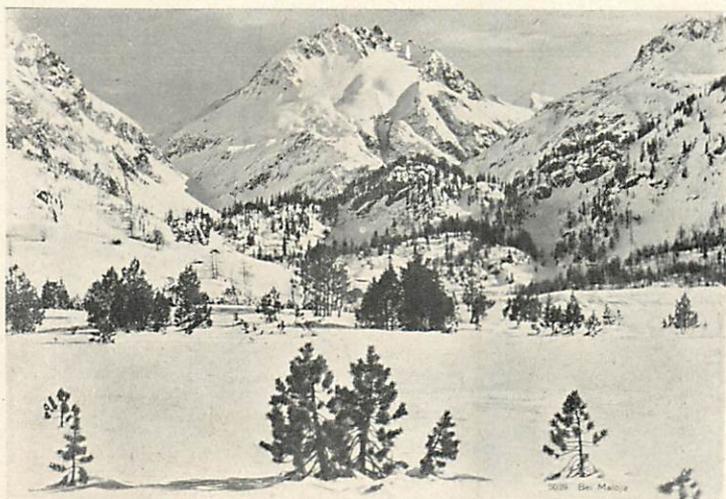
〔三〕

寫 眞 版

Andersen の飛躍振り

St. Moritz 附近

昭和三年六月發行



St. Moritz 附近

九重火山群の植物景觀概要

竹 内 亮

一、緒 言

私は數年以來、九重火山群に興味を持ち、度々その地を訪れて居る者であるが、ここでは主として、その山群の植物景觀に就て、その概要を記述したいと思ふ。

すでに知らるゝ如く、九州本島の中央部には地質學的に阿蘇水道と稱せらるゝ一帯の火山地帯が東西に貫通し、その地域には大小幾多の火山群の噴出を見て居るが、九重火山群もその一であつて、この地帯の略中央に於て大阿蘇火山と略南北に相對して開潤な高原上に聳えて居る。

九州は云ふ迄もなく南方溫暖の地に位置するので、眞の高山植物帯の發達する高山——勿論概して高山の高度が低いこともあるが——がないのである。しかし九重火山群はその最高點が一七八八米に達して九州本島の最高點をなし、しかも一五〇〇米以上の高地が可成な廣い區域を占めて居ること、猶、活動の餘勢を保つ火山であること等の現在の狀態と、地質時代の過去に於ける植物移動の結果等とが結びついて、可成高山型な植物群落を見ることが出来るのである。この景觀は南方に近く殆んど同高度で聳ゆる祖母山（一七五八米）に於て山頂迄樹林に蔽はれるのと甚だ奇妙な對照をなして居る。又此附近には大阿蘇火山、由布鶴見火山、英彦山火山等があつて、それ等との比較觀察にも便利である。

研究すべき問題は多いが、私はここで主に植物群落の配布状態の概要を記し、更に其の起原に關する問題に、一寸ふれて見たいと思ふ。

二、位置と地形、地質等

九重火山群の地域は主に大分縣直入郡久住村、郡野村、阿蘇野村、玖珠郡飯田村に跨り、西部の一部は熊本縣阿蘇郡に及んで居る。この一帯の地域は九州本島中央部の高原地帯の一部であつて、約五〇〇米乃至一〇〇〇米内外の高度を有する實に開闊な模式的高原であつて、南は大阿蘇の外輪の高原に續き廣くひろがって居る。九重火山群はこの高原の上に花牟禮火山の西に接して位置し、納富氏は全山群を三つの聚巒、即ち東より大船火山聚巒、九重火山聚巒及湯坪火山聚巒に分けて居られるが、それ等は互に相接して其山幅東西約二一籽、南北約一六籽に亘つて居る。私はここでは記述の便宜上略、納富氏に従つて用語及名稱の一部を變更して大船火山彙、久住火山彙及湯坪火山彙とする。

大船火山彙は黒岳（一五五六米）大船山（一七八七米）及び平治岳（一六四三米）の三山、略鼎足狀に相接して聳え、大船山は更にその構成上から南大船山及北大船山に分ける。久住火山彙は前山彙の西に連なり、全火山群の中心をなして、久住山（一七八八米）を盟主として本山（一七六〇米）三股山（一七四五米）星生山（一七六四米）及び肥前ヶ城（一五二二米）等の高峯相接して聳え、地形甚だ複雑を極めて居る。湯坪火山彙は、この西に接し涌蓋山（一五〇〇米）を最高として玖珠川の水源の溪谷を略半圓狀に圍みて一目山（一二八七米）獵師岳（一四二三米）合頭山（一三六〇米）黒岩山（一五〇三米）及泉水山（一三〇二米）等相連なり、全体の地形概して穩和である。納富氏によれば、この玖珠川の上流の溪谷は舊火口底であつて、かつて存在した湯坪火山の火口をなすものであると云ふ。以上の全火山群の山々の間には爆裂火口、火口湖、火口原、硫氣孔、礦泉、岩石地、濕原等甚だ多く地狀複雑を極めて居る。従つて植物群落も實に多種多様の相を呈し生態學的觀察の興味も多い。

納富氏によれば、本火山群の基底をなすものは第三紀層であつて、噴出の時期は阿蘇火山の噴出以前であつたと考へられる由である。本山群の噴出は略三期に區劃せられ、最初に輝石安山岩、中頃角閃安山岩、終りに再び輝石安山岩の噴出を見て居る由で、岩質は基性より酸性に移り再び基性となつて居る。

湯坪火山彙の基底部は此第一期の噴出岩に發し、大船火山彙は終期の岩質で、他は中期の岩質に屬すると云ふ。

三、植物景觀概要

1、總説

九重火山群の前記の如く、その地形複雑を極め多様の生態的條件を包含するを以て仔細に觀察すれば、可成複雑な植物景觀を構成して居るけれども、これを概観すれば概して草原性景觀が主で、特に喬木林の發達が局限されて居るのを見ることが出来る。それから學術的見地から甚だ興味のあるのは、北周極植物要素の一であるコケモモを主とした矮小灌木の褥狀群落の廣大なる分布を見ることである。コケモモは九州の他の高山には全く産せず、しかも、すでに牧野氏によつて指摘された如く、日本に於ける本種分布の南限地をなすことは、植物學上甚だ注意すべきことであるのみならず、その生育状態が甚だ豊富に繁茂して寒地、又は高山帯に於て見られる如き模式的な褥狀群落を形成することは、生態學上甚だ興味あることである。又處々に酸性濕原が存在し不完全ながら泥炭濕原の状態を示すものも少くない。以下植物群落の配布状態を喬木林、灌木林、草原、特殊植物群落の諸項に分けて觀察の歩を進めやう。

ロ、喬木林

全山群を通じ喬木林は主に約一四〇〇米乃至一五〇〇米以下の高さに分布し、其れ以上の高度では概して樹勢萎縮して灌木の着枝をなす場合が多い。喬木林の最もよく發達するのは東部の大船火山彙であつて、黒岳の如きは全山喬木林の密林に蔽はれ、その山名も全くそれに由來して居るが、大船山の西側及び平治岳では、その發達が欠如するか又は不良であ

る。西部の湯坪火山彙に於ては處々に小團林を見るが、久住火山彙に於ては概して發達が不良である。樹種はブナを主としてミヅナラ、クマシデ、イタヤ、ヤマモミヂ、ハリギリ、シナノキ、ナナカマド等が上層をなし、オホカメノキ、サハフタギ、コミネカヘデ等がその下層をつくり、樹下にはハルトラノヲ、チゴユリ、ヒススゲ、ヤハタサウ、コタチツボスミレ、ミヤマザサ等が見られる。ここに注意すべきことは、自生の針葉喬木を殆んど見ないことである。九州の全山地を通じモミ及ツガは最も普通に現出する針葉樹種であるが、九重火山群の東部に連なる花牟禮火山にはモミの自生を見るにかゝはらず本山群には見ることが出来ない。

ハ、灌 木 林

九重火山群に於ける約一四〇〇米乃至一五〇〇米以上の山地では、ヤシヤブシ、ノリウツギ、ツクシヤブウツギ、コミネカエデ、ベニドウダン、サハフタギ、ナナカマド等の灌木林を見るが、その最も良好な發達をするのは黒岳及び大船山で、その他の部分では點々小團林をなすに止まる。斯様な灌木林は屢々岩石地を蔽ひ爆裂火口の側壁、轉石多き溪谷の底等に多く現出する。ツクシヤクナゲ、ヒカゲツ、ジは、この様な岩石地の灌木林中に多く生じ、ミヤマキリシマも亦混生するのを見る。ミヤマキリシマは又屢々殆んど純群落をなして山側山頂を蔽ひ初夏の開花期は甚だ美觀である。

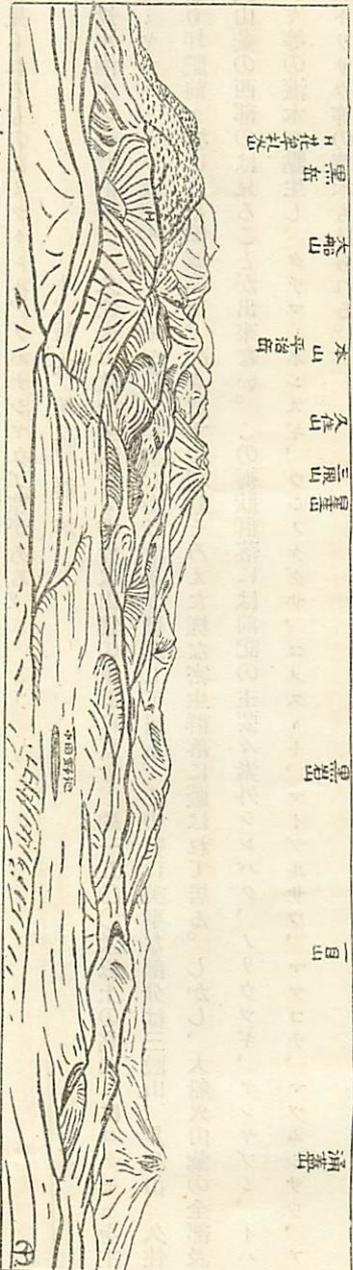
九重火山群の高地で最も興味を惹くのは、久住火山彙の約一五〇〇米以上の高地の殆んど全部を蔽ふコケモモを主とし、ミヤマキリシマ、イハカガミ等を伴ふ矮小灌木の櫛狀群落であるが、この群落については別に後記することにする。

ニ、草 原

草原は全山群の殆んど大部分を蔽ひ、特に山麓及び西部の湯坪火山彙によく發達するが、大体、乾燥草原、中性草原及び濕原の三相に區別することが出来る。

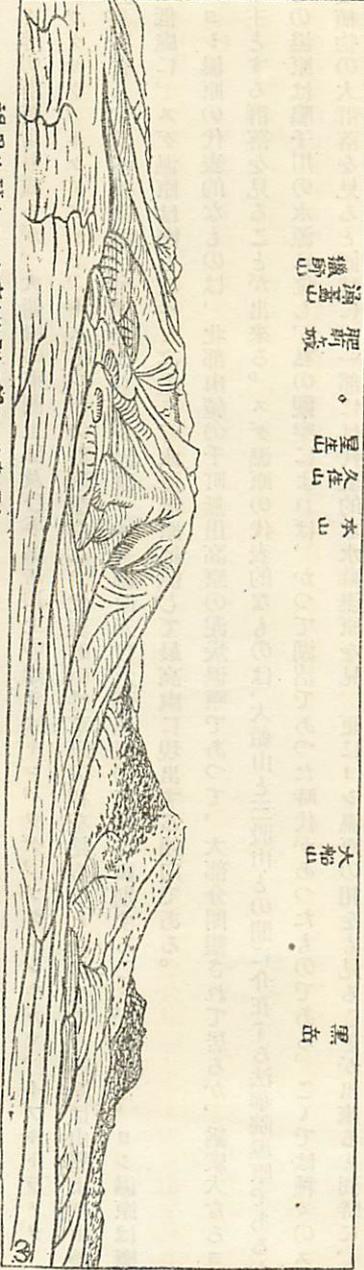
乾燥草原は概して禾本及び莎草の群落で、時にス、キの大群落を見ることは、これは主として久住火山彙に見る處であつて、その他の地域では濕地を除いて殆んど全面に亘り中性草原の區域である。

黒岳
 三原山
 各岳
 本山 平湯岳
 船山
 黒岳
 日花平丸池
 黒岳
 一原山
 湯釜



由布岳 頂上ヨリ 九重火山群ヲ望ム (北面)

大船山
 黒岳
 水山
 久住山
 星岳
 肥新城
 湯釜山
 糠野山



祖母山頂上ヨリ 九重火山群ヲ望ム (南面)

しかし、その大部分は、やゝ半乾性の相を呈し、ワラビ、ススキ、ツバナ、メドハギ、カハラマツバ、ワレモコウ、キンボウゲ等の群落より成るが、大船山の東側上部及び平治岳頂上の如きはキンバウゲ、ツクシシホガマ、イブキトラノヲ、シモツケサウ、ホクチアザミ、キスミレ等の群落をなし、代表的中性草原の相を見ることが出来る。濕原は山麓より山頂に亘りて存し、其植物景觀は外見上からヨシ濕原、スゲ濕原及び水蘚濕原の三相に區別することが出来る。ヨシ濕原は概して低處に、スゲ濕原は概してやゝ高處に、水蘚濕原は概して最高處に現出する傾向である。

ヨシ濕原の代表的なものは、北部山麓の千町無田高原の泥炭濕原であつて、大部分開墾されて居るが、猶廣大なるヨシを主とする群落を見ることが出来る。スゲ濕原の代表的なものは、大船山と三股山との間に介在する法華院濕原であるが、この濕原は鳴子川の水源に位し、私の觀察によれば、かつて湖沼であつた時代があつたものである。こゝでは種々のスゲ屬植物の大群落を見ると同時に、一部には代表的な水蘚濕原を見、更にヨシ濕原の相も見ることが出来ると同時に、濕原の植物が水蘚相よりスゲ相に移り、更にヨシ相に到る過程を觀察することが出来る。高地の水蘚濕原については、項を改めて記すことにする。これ等の濕原を通じてサハギキヤウ、イハウサウ、アブラガヤ等が見られ、主に山腹以下の濕原に見られるものにミヅトンボ、ノハナシヤウ等がある。

ホ、特殊植物群落

矮小灌木の褥狀群落 久住火山臺の全部から湯坪火山臺の東部に亘り、約一五〇〇米以上の高地にはコケモモを主としミヤマキリシマ及びイハカガミを伴ふ美事な褥狀群落が発達して居る。その特に美事な部分は三股山、星生山、久住山より坪肥前ヶ城に亘る區域等で、高さ數寸の刈りそろえた様な密生群落に蔽はれて居る。しかし、大船火山臺の全部及湯火山臺の西部のは見ることが出来ない。この褥狀群落には前記の主要々素外シンバク、ノリウツギ、ヤシヤブシ、イハヤナギ等の灌木を點生し、タチマンネンスギ、ウシノケグサ、コメス、キ、マイヅルサウ、ママコナ、マツムシサウ、アキノキリサウ等の草本も見られる。

高地の水蘚濕原 久住火山臺の高處の凹地には處々に濕原を見るが、その中には美事な水蘚濕原がある。その地區では水蘚及び他の二三の蘚が少しの水面を残して濕地を被ひ、その間にコケモモ、イハカガミ、コギバウシ、サハギキヨウ、タチマンネンスギ、マイヅルサウ、アキノキリンサウ、ヒメカウモリ等の生ずるのを見ることが出来る。こゝで特に興味のあることは、概して植物が特に矮小形を呈するものが多いことで、これは生育地の酸度の高いこと、湿度が特に低いこと等が可成影響して居るものと考へられる。屋久島の高地にも非常に矮小な植物が多く生ずることが知られて居るが、正宗嚴敬氏によれば、その生育地がこの地のものと相似て居る様である。

河流と植物 山中の小平地を流るゝ河流の兩岸に沿つた狭い地域に樹林群落が蔽つて、多くは草原性の平地の間に帶狀の樹林を見ることが多い。その樹種はヤシヤブシ、ヤマハンノキ、ノリウツギ、アセビ、サラサダウダン、ツクシシヤクナゲ等で、樹下にはイハカガミ、マイヅルサウ、ヒメカウモリ等が多いのを見るが、これ等は多くはその四圍の草原には普通見ることが少なく、主にその上部の山頂山側に多く生ずる種類で、河流に沿つて下部に降下した種類であることを示して居る。

硫氣孔附近の植物 硫氣孔の附近は殆んど地表裸出して、荒涼たる景觀を呈して居るが、猶イタドリ、イソヤマテンツキ、キンスゲ等の様な種類が生ずるのを見ることが出来る。

蘆泉の植物群落 溫泉、冷泉及びそれ等より出づる小流には、主に下等藻類及蘚苔類の群落を見ることが出来る。それ等は、その泉質及温度に應じて可成變化するものゝ様であるが、私は未だこの方面に關しては充分の觀察材料をもつて居ないので詳記しないことにする。

四、植物景觀の起原

私は前章に於て、九重火山群の植物景觀に就いてその概要を記し終つたが、こゝでは、いかにして斯くの如き景觀が成

立したかに就いて少しばかり考察して見たいと思ふ。

全山群を通じ概して樹林の發達が不良で、草原性の景觀がよく發達することについては、これを第一次的原因と、第二次的原因とに分けて考へることが出来る。第一次的原因としては山地が比較的新しい火山であるがため、未だ全部が樹林に蔽はるゝ迄に植物群落の變遷過程が進んで居ないであらうことが一つ、平坦な山麓及山側の草原性景觀の良好な發達は樹林群落要素の侵入機会を阻害するであらうことが二つ（岩石地に樹林の發達が良好なることは、その間の消息を示すものではないかと思はれる）等であるが、第二次的原因としては人爲的のものとして牧草採集のために、早春、山燒を行ふことによる野火の害、放牧の盛んなために牛馬に荒らされること等は、可成重要なものであるらしい。又自然的原因としては、新しい火山活動に伴ふ害等が考へられる。

上記最後の新しい火山活動に伴ふ害なる一項については、こゝに少しく説明の必要がある。久住火山羣の植物景觀が、全山群を通じて最も樹林の發達が不良であることの起原については決して古いものでなくして、約三十年以來のことに屬する由である。現今、久住火山羣の高處は殆んど全く喬木、灌木の群落を見ないと云つていゝ位の狀態にあるが、里人の言によれば約三十年以前では、三股山は大部分ブナの美林に蔽はれ、久住山頂及その附近一帯にはヤシヤブシ、ノリウツギ、ツクシヤブウツギ、ナ、カマド、サラサダウダン等の密な灌木林で蔽はれて居つた由で、現今それ等の存在を證する林木は到る處に白くさらされて残つて居る。前記矮小灌木の褥狀群落の良好なる發達も、特にその後にて於て擴大形成されたものゝ由である。その樹林を枯死せしめた原因については、今に至つてこれと斷定する何等の資料も得られないけれど、人々の言を綜合して、私は九重硫黄礦山の硫氣孔の勢力増大に關係して居るらしく考へて居る。次に大船火山羣に於てのみ喬木林の發達が非常に良好であることは、黒岳の岩骨裸出せる地形と共に、古い火山である花牟禮火山と相接するが一つの重要な原因であつたであらうと考へられるが、更に又基岩が基性のものであつて、土壤の狀態も植物の生育に適當であり、且つ久住火山羣に於ける硫氣孔活動の影響もその方面に迄及ばなかつた等によるであらう。

次に九重火山群には、九州の他の高山と同様に可成の本州高山と共通の高山植物要素、例へばタチマンネンシギ、シンバリ、コメス、キ、ウシノケグサ、マイヅルサウ、イハカガミ、アキノキリンサウ等を見ることが出来る。このことは遠き過去に於て九州と本州との間に他の高山に全く現出しないコケモモの豊富な群落をも見ることが出来る。このことは遠き過去に於て九州と本州との間に於ける高山植物分布の容易な機會のあつたことを證し、その一部が現今の九重火山群にも残されたことを知ることが出来る。又郡場、田代兩氏が阿蘇火山に於て指摘されたことによれば、その北部側に於ては大陸草原要素であるキスミレ、ヤツシロサウ等の南部側に分布しない植物が見られ、その南部側の植物は、その南の九州南部山系の植物要素を多く含む由である。私の踏査によれば、その九州南部山系の高地には、九州の北部になくして四國、本州に見出さるゝイチ井、ハリモミの如き植物の生ずるのを見た。これ等によると過去に於ける九州の植物區系は、その地質構造に示されるものと一致して、一方は本州南部及び四國に連絡し、一方は中國地方及び大陸との連絡があつたものゝ様に考へられる。地質學上の阿蘇水道は地形的に南北九州を連絡するのみならず、植物分布に於ても兩系統のものを連絡したものであると考へられるが、この九重火山群のコケモモが、九州の他の高山に現出しないことは、高山植物の南下はその當時、北部大陸系統或は中國地方のものが、先づ九重火山群を南限として地形的に南部に及ぶことが出来なかつたものゝ名残ではないかと考へられる。

第二回 冬期オリンピック・スキー競技

(續)

伴 素 彦

二月十五日

馬鹿に暖いと思つたら雨になつた。スケートは無論中止になつた。雪がどんく〜とける。道は馬糞だらけになつた。これぢあオリンピックは、やめになるんぢあないかと思はれた。オリンピックの前は、たまには雪が降ればい〜と思ふ程よく晴れた天氣が續いたのに、随分意地が悪いものだ。瑞西の天氣がい〜ときは實に氣持がい〜。一點の雲もなく、綺麗な空に、はれて太陽が實に暖い。風がない爲だらう。之でよく雪がとけないと思ふ。一寸北海道あたりでは想像がつかない天氣だ。寫真もい〜のが出来る筈だ。雪が毎日降る北海道とはシャンツェの手入も比較にならない程だ。

二月十七日

朝七時頃、氣溫零下七度程、雪は一昨日の雨で氷つてる。普通のところはエツヂが立たない程硬い。森の中のコースはサラ〜と荒い雪の様な雪が、コースの中だけにある。コースは五〇軒とは反對に、サンモリッツ湖畔を往復する随分上りの多い、しかも林の中を抜けて歩く難コースだつたそうである。雪が前述の通り悪いし、コースは難しいし、普通の練習の爲なら一寸通る氣がしないさうである。サンモリッツで、この様な條件の下におかれ様とは我々の少しも豫想しなかつたところである。

五〇軒における瑞典の意外の活躍に驚いた人々は、此の日の諾威と瑞典の争ひに非常な興味をもたずには居られなかつた。

吾々日本も此の十八籽に一番期待をしてゐたのである。
 コルチナ、クロスターズに於ける成績から考へて此競技が
 一番有利な様に思はれた。矢澤君は屹度いゝ所へ食ひ込む
 であらうと思はれた。その外の人達も必ず可なりの成績で
 あらうと思つた。

此の競走には、複合競技の人も、只十八籽の人も一緒に
 混つてスタートした。時間は三〇秒おき、出場人員八〇名
 先づ競走の結果を次に述べる。

18籽の結果

順位	選手名	国籍	時分秒
1.	Johan Grüttemstraten	Norge	1. 37. 01
2.	Ole Hegge	"	1. 40. 11
3.	Reidar Oedegaard	Finland	1. 41. 29
4.	Veli Saarinen	Suede	1. 41. 59
6.	Per Erik Hedlund	"	1. 41. 59
7a.	Lars Th. Johnson	Finland	1. 41. 59
7b.	Matti Lappalainen	Suede	1. 42. 04
8.	Sven L. Usterström	Finland	1. 44. 37
9.	Ville Mattila	Tchecoslovaquie	1. 47. 53
10.	Franz Dornh	"	1. 47. 55
11.	Vladimer Nowak	Allemagne	1. 48. 56
12.	Einari Nisessi	Suisse	1. 49. 46
13.	Ludwig Boeck	Tchecoslovaquie	1. 50. 20
14.	Walter Busmann	"	
15.	Olakar Nemecy	"	

16.	Harald Panngarten	Autriche	1. 51. 43
17.	Josef Bajak	Pologne	1. 54. 38
18.	Oto Wahl	Allemagne	1. 55. 00
19.	Hano Bauer	Allemagne	1. 57. 03
20.	Otto Furrer	Suisse	1. 57. 05
21.	Matic Demetz	Italie	1. 57. 08
22.	Zdzislaw Motyka	Pologne	1. 58. 10
23.	Florjan Zogg	Suisse	1. 58. 52
24.	Andrzej Krzetowski	Pologne	1. 59. 12
25.	Josko gansa	Yougoslavie	2. 01. 14
26.	矢澤	France	2. 02. 29
27.	Francois Vallier	France	2. 03. 27
28.	Wilhelm Braun	Allemagne	2. 03. 52
29.	Paul Simon	France	2. 03. 54
30.	竹節	France	2. 04. 20
31.	永田	France	2. 04. 23
32.	Maurice Mandrillon	France	2. 04. 30
33.	Giovanna Testa	Italie	2. 08. 49
34.	Viale Venzi	France	2. 09. 28
35.	Marial Payot	France	2. 09. 42
36.	高橋	Canada	2. 10. 57
37.	W. B. Thompson	Yougoslavie	2. 12. 24
38.	Peter Klofutar	Canada	2. 14. 08
39.	Janko Jansa	"	2. 19. 54
40.	Merritt Putman	Canada	2. 22. 40
41.	Boris Rezek	Yougoslavie	2. 28. 44
42.	Anders Haugen	Etas-Unis	2. 30. 30
43.	Charles Proctor	"	2. 35. 00
44.	Rolf Monson	"	2. 48. 00

【註】 Norge—諾威、Finland—芬蘭、Suede—瑞典

Tchecoslovaquie—チエコスロヴァキヤ、 Allemagne—獨逸
 Autriche—奧地利、 Pologne—波蘭、 Italie—伊太利
 Yougoslavie—ユーゴスラビヤ、 France—フランス
 Canada—カナダ、 Etats-Unis—北米合衆國

複合競技 18籽の結果	タイム	得點
1. Johan Gröttembraten	Norge	1.37.01 20.000
2. Hans Vinjarengen	"	1.41.44 17.750
3. Esko Jarvhen	Finland	1.46.23 15.375
4. Paavo Nuotio	"	1.48.46 14.125
5. Bronislav Czech	Pologne	1.48.58 14.125
6. Ole Köhlerud	Norge	1.50.17 13.375
7. Oetkar Nemecky	Tchecoslovaquie	1.50.20 13.370
8. John Snerud	Norge	1.50.51 13.125
9. Harald Paunngaren	Autriche	1.51.43 12.750
10. Sven J. Erikson	Suede	1.52.20 12.875
1. Gustav Müller	Allemagne	1.52.43 12.250
12. David Zogg	Suisse	1.55.56 10.625
13. Adolf Rubi	"	1.59.43 10.250
14. Walter Glass	Allemagne	2.00.50 8.750
15. Franz Wende	Tchecoslovaquie	2.00.57 8.125
16. Stephan Lauener	Suisse	2.00.57 8.125
17. Max Kröckel	Allemagne	2.00.53 8.125
18. Walter Buchberger	Tchecoslovaquie	2.02.36
19. Francois Vallier	France	2.03.27
20. 竹 節	"	2.04.20
21. Rudolf Purket	Tchecoslovaquie	2.04.24
22. Karl Neuner	Allemagne	2.04.25
23. Hans Eidenbenz	Suisse	2.05.26

24. Stanislaw Motyka	Pologne	2.08.31
25. Marcel Bérand	France	2.09.16
26. Vitale Venzi	Italie	2.09.28
27. Martial Payot	France	2.09.42
28. W. B. Thompson	Canada	2.12.24
29. Alexander Rozmus	Pologne	2.12.25
30. Kiebert Bolmat	France	2.16.40
31. Merritt Putman	Canada	2.22.40
32. Anders Haugen	Etats-Unis	2.30.30
33. Charles Proctor	"	2.35.00
34. Rolf Monson	"	2.48.00

此の二つの競技は全然一緒に行はれたのではあるが、成績は二つに分けて發表されるから、私も先づ複合競技ではない普通の十八籽に就いて述べる。

諾威は、見事に五〇籽の復讐をした。瑞典の Hedlund や Johnson を破つて一、二、三等を占めてしまつた。期待した Gröttembraten は矢張強かつた。二等の Hegge よりも二分早い。Hegge も之で五〇籽の申譯が立つたと言ふものである。

芬蘭は Sarinen が四等に食ひ込んだ。之等は Haakonsen (ノールウェー) 六等は Hedlund 七等は Johnson と、之として有名な Finland の Lappalainen。

九等迄は皆腕に十字のマークをつけた北歐の三ヶ國の人達である。大陸では十等にチエツコの Donth に始めて顔を出してゐる。その次がチエツコの Nowak (此の人はコルチナで十七籽の二等をとつた美術學生) 五〇籽でも九等までは全部北歐であつた事から考へて Duer Lauf と Langlauf では北歐は斷然強く、他の國は漸つと十等に入れる位だ。中歐ではチエツコの次には獨逸の Boeck が十三位にゐる。十四位の Busmann は瑞西では一番よかつたのである。此の競技では北歐の三ヶ國を除けばチエツコが最も成績である。

日本からは矢澤、竹節、永田、高橋が出場した。大いに奮闘したが、一番いゝ矢澤君が二十六位、竹節君が三十位、永田君三十一位、高橋君三十六位と云ふ成績に終つた。

期待した矢澤君は前半は大變成績が良かったが、後半に硬い雪と難コースにストックを壊して、一方は使えず殆ど片一方の杖だけで走り、遂成績をとれなかつたのは惜しかつた。杖さえ、しつかりしてゐたら二時間を切つて十臺にいったらうと思はれた。竹節君もストックを壊したのは残念であつた。永田、高橋兩君も五〇籽の疲勞が、すつかりと

れなかつたらしく、思はしくなく、日本は結局大体中位から後の成績であつた。

期待した矢澤君はストックを折るし、外の三君は五〇籽の疲勞(始めて走つた五〇籽の)が恢復しないらしく、此の競技のコンデイションは吾々には不利であつた。

一等と矢澤君の成績では二十五分程差があるが、中歐ヨーロッパで一番いゝ Donth とは約五分の差である。初めて本場へ出て来て(今までは本と寫真と歐洲からの通信だけで獨習して來たのだ)、此の成績だから、中歐ヨーロッパは、そんなに吾々には恐ろしくない様に思へる。遠くから來た吾々の練習期日と、彼等の練習期間とを考へても、もし彼等が日本へ來たら、日本の選手は相當の程度まで肉迫し得るんぢないだらうか。

此の次のオリンピックに吾々は、いきなり北歐に追いつく事は難しいかも知れないが、中歐には追いつける可能性が大いにある。吾々は大いに努力して先づ中歐を破りたいものだ。しかし四年の間には中歐も大に進歩するに違ひはない。それに追いつかんとする日本は、彼等以上に苦しまなければならぬのは當然である。

次の複合競技の十八籽

Grottenstraten は Langlauf にも複合競技にも出場してゐるから、彼が複合の十八籽にも一等になつたのは無論である。次は諾威の Vinjarengen 二等は Finland の Jarvinen 四等と同じくフィン人の Nuoio、そして此の競技には中歐が奮闘して、波蘭の Czach が五位、チェッコの Kenecky が六等になつた。之は諾威、芬蘭、瑞典の複合競技の人達が比較的ジャムブに強く、走る方が弱い性であらう。

Grottenstraten は反對に走る方が強い。無論ジャムブだつて一流ではあるが。

日本からは麻生君と竹節君が出場した。竹節君は二〇位で、六・三七五點を得た。ジャムブがよければ上位になれる成績である。

麻生君はストックを壊して棄權した。五〇籽にも十八籽にも全部走る事が出来なかつたのは、君にも又吾々にも甚だ残念であつた。

此の競走を私は三ヶ所で見たと。スタートから二籽程の所と十五、六籽の所とゴールである。

スタートから二、三籽の所は急な崖に大きな樹の多い所

につけた道である。一寸急な登り、三〇秒おきなので此處へ来るまでに、もう色々順序が狂つて選手がやつてくる。ノールエーや芬蘭の選手は物凄しい勢で、とんでゆく。瑞典は矢張り早いのが体が重そうである。中歐ヨーロッパの人達は北歐から見ると如何にもギコチない。

Grottenstraten は登りの技術が、うまいのだそうであるが實に無理がなく登つて行く。何の苦もなさそうである。杖の押し方が實に早いのも目につく。諾威の人達は此競技では如何にも覇氣があつた。

吾々はオリンピックの後におスローでワックスの塗り方を習つて、その有効なのに驚嘆したが、ノールエーの人達のスキーは登りは後滑りしないし、降りには實によく滑る。彼等の登りのテクニクのうまいせいもあるが、私の前の登りで彼等は勿論腕で突張つてはいるが眞直に登つて行つたが、日本の選手は残念乍ら *the Grip* を交へねばならなかつた。之は甚だ不利なのは明である。ワックスの技術が（登りのテクニクもあらうが）彼等は實に進んでゐる降りもうまいそうであるが、ターンがまたうまいそうである。ステップ・ターンである。ステップ・ターンは諾威人

が實にうまい。オスローの地形が然らしめたのであらうが實にうまい。此の方法はターンに當つて、スピードを落さないから甚だ有効である。

コースは實にひどいコースで、日本のコースは決して文句を言へないそうである。

選手の用ひたビンディングは大体 *Besenda* Ⅱで、瑞西は B. B. である。佛蘭西が、どこかで *Unitfeld* をはいてゐた。

Grötensbrunnen はベルゲンダールをはいてゐたが、*Heege* 等が *Wror With* と云ふ新しいビンディングをはいてゐた。

ノールウエーで最も新しいビンディングで、ベルゲンダールよりは踵があがり難いが、スキーの操作がベルゲンダールより容易であるから、短距離には適する様に思はれる。

日本の選手は全部ベルゲンダールを用ひた。スキーは麻生君以外は日本から持参した早大式の軽いスキーをはいた。之はゴールで氣がついたが、ゴールインは下りになつてゐるので、色々の人の滑るのを見てゐると、早い人のスキーは皆よく滑る。之は當然な話だが、日本の選手のスキーは滑りが悪かつた。ワックスの爲もあるが、体重の関係とスキーの重さ、長さの関係が影響してゐるに違ひない。スキ

ーの長さ、否それよりも、むしろ、その重さと体重の関係、日本人に適したスキーを吾々はよく見出さねばなるまい。出来る丈重く、そして相當に長いスキーを操縦出来れば、得な譯であるから、只軽くくとスキーを作るのは一寸考へねばなるまい。

之で十八軒はすんだ。
明日はジャムブである。

ジャムブ競技では、諾威が優勝するに違ひない事は、今までの練習振りから見ても明である。

複合競技は *Grötensbrunnen* や *Vijnevgen* が二度とも立てば文句がないが、もし轉んだら三等に *Jarvinen* がゐる。ジャムブは彼もうまい。四等には *Finland* の名ジャムバーがゐる。決して油断はなるまい。

十八日午前十時から複合競技のジャムブが始まる。シャツエのコンデイションは頗る悪い。着陸斜面は昨日大勢の人夫をいれて、すっかり掘り返へして固めたが、凍つた雪だから具合が悪い。アプローチはガタ／＼だ。

此日は大分寒い風が少しある。しかしシャツエは森の中から風が當る事はない。只寒いには困つた。午前中は

見物人も案外に少くスタンドはあいてゐる。

此の日のスタートは、頂上から十五米位下の處と定められた。頂上からでは危険であるからである。この雪では仰々危険である。何時もならオリンピック・シヤンツェは頂上から飛んでも、私は別に恐ろしいと思つた事がなかつたが、今日はちと尻込みをせざるを得ない。上から飛ぶのは。

シヤムバーのスタート順は昨日の競走の番號の通りである。昨日は Langlauf の人も一緒に走つたから、今日は抜けてゐる番號がある譯である。

日本から麻生、竹節兩君出場。

誰が何米どんなに飛んだかと云ふ事は、此處に書き出して、皆さんには、選手の名が親しみのない以上、興味はなからうと思ふから(然も私は、それをよく記憶してゐない)大体をのべる。

先づ發表されたシヤムプの結果をあける。此處に出てゐないのは二回とも轉倒した人である。

	得點	距	難
1. Rudolf Purkert, Teheco	18.833	一回	62½
2. Vitale Venzi, Italia	16.588	53	60½

3. John Snerud, Norway	16.917	60½	52½
4. Stephan Lanener, Suisse	16.542	50½	59
5. Sven J. Eriksson, Suède	16.312	51½	57½
6. Max Kröckel, Allemagne	15.812	52½	51½
7. Paavo Nuotio, Finland	15.729	52½	52½
8. Johan Gröttemstraten, Norv.	15.667	49½	56
9. Hans Eidenbenz, Suisse.	15.297	47½	51½
10. Alex Rozmus, Pologne	15.187	49	56½
11. Walter Glass, Allemagne.	15.104	46½	55
12. Adolf Rubi, Suisse.	15.000	46½	54
13. Anders Hagen, U.S.A.	14.825	51	49
14. Walter Buchberger, Teheco.	14.662	49½	50
15. Charles Proctor, U.S.A.	14.417	47	51½
16. Esko Jarvinen, Finland.	14.246	46	
17. David Zogg, Suisse.	13.187	47	47
18. Ottakar Nemecky, Teheco.	12.616	40	48½
19. Ludwig Doeck, Allemagne.	12.395	36	48
20. Martial Payot, France.	12.042	33	46½
21. Viinjarengen,			
22. Ole Kolterud, Norv	10.930	59	* 65
23. Harald Panngarten, Autriche.	10.928	38	40未滿
24. Stanislaw Motyka, Pologne.	10.818		
25. Bronislav Czech, Pologne.	9.917	* 51	60
26. Merritt Putman, Canada.	9.706	35	37½
27. Klebert Balmat, France.	8.238	47	* 55½
28. Gustav Müller, Allemagne.	7.978	41½	* 60½

* 印は轉倒

此の競技は意外にもノールウェーは振はずに、チェコの

Purket (一昨年のコルチナに於ける F. I. S. の複合競技の勝者) が一位を占め、二等は伊太利の Venzl と定つた。しかし Grötensbraten は確實に(決して美しくはなかつた)立つたから、彼の複合競技に於ける優勝は先づ疑のない所である。

此のジャムプに於けるノールウエーの敗因は、最初に Vinjarengen が轉倒し、Kollerud が第二回目六五米飛んで倒れた事にあらう。Grötensbraten は當然確實に立たねばならぬし、Snesrud は折角一回目に六〇米出したのに、二回目は自重して五二米位で遠慮せねばならなかつた。ノールウエーのジャムプは、然し乍ら、實にうまい。中歐とは一段は確に違つてゐる。練習のときに明にそれが認められる。その力強い、ほんとに足でシャンツェをけつてとぶ、そのサツツ猛烈な前傾、他國の選手はグット落ちる様な氣がする。着陸斜面の下から見てゐると、頭から先に着陸する様に見える。スキーマの操作も綺麗な。シヨックのない、立つ様に出來てゐる瑞西のシャンツェは彼等には容易らしい。皆、腰から折つてとぶ。中歐の人達よりは確に一段上だ。然し此の競技には、あんまり榮えなかつた。それは Purket の出來が、

あんまり、よすぎたからだ。強いサツツ、いい前傾、一寸もノールウエー人に劣らなかつた。彼の練習中に私は、あんなフオームを決して見なかつた。サンモリーツツに來たノールウエーの選手が大きく彼に影響したのかも知れない。ノールウエー人は勝たねばならぬので固くなり、しかも Vinjarengen と Kollerud が轉んだので餘計に自重したのに反し Purket や Venzl は Langlauf では成績がよくないし又複合競技のジャムプ以外のジャムプにも出るので、恐らく勝敗を度外視して飛んだらうと思はれる。其處に此競技に於けるノールウエーの不振の原因がありさうである。

最長不倒距離は Purket の六二米である。Norway の、Kollerud は第二回目の飛躍に六十五米を飛んだが惜しくも轉倒した。二等をとつた伊太利の Venzl は十月頃から伊太利スキー協會が、わざ／＼ノールウエーから招聘したりスレガルドにコーチせられただけあつてよく飛んだ。よく張つてゐた。三位は Norway の John Snesrud であつた。四位は瑞西の Laner 五位は瑞典の Eriksson 六等が獨逸の Krockel 七等が芬蘭の Nnotio 八等が Grötensbraten である。波蘭は中歐の獨・瑞・チェコ等に比し劣らない。波蘭

は、今年はノルウエーからコーチを招いただけである。

アメリカ、フランス等の事はジャムブ競技に於てのへる出場者が同じであるからである。麻生君は不幸二回とも轉倒した。試合前日は、足の負傷のために練習出来なかつたのは君のために甚だ不利であつた。此のシャントエで五四米出した事のある君も今日は三七米位しか飛べなかつた。

竹節君も二度とも轉倒した。三四米である。距離の出ないのは致しかたがないとして、二度とも立てば、複合競技全体の結果としては相當の處へ行けたらうに、惜しい事をした。次に複合競技全体の成績をあける。

1. Johan Gröttnsbraten, Norv.	20.000	15.637	17.833
2. John Snøerud, Norvège	13.125	16.917	15.021
3. Paavo Nuotio, Finlande	14.125	15.729	14.927
4. Esko Jarvinen, "	15.375	14.246	14.810
5. Sven J. Eriksson, Suède	12.875	16.312	14.593
6. Hans Vinjarengen, Norvège	17.750	11.020	14.385
7. Ludwig Boeck, Allemagne	14.125	12.395	13.260
8. Otakar Nemecky, Tchécoslov.	13.375	12.616	12.990
9. Adolf Rudi, Suisse	10.250	15.000	12.625
10. Rudolf Fur ker, Tchécosl.	6.375	18.833	12.604
11. Stephan Lanener, Suisse	8.125	16.542	12.333
12. Ole Kohlerud, Norvège	13.375	10.990	12.182
13. Bronislaw Czech, Pologne	14.125	9.917	12.020

14. Max Kriekel, Allemagne	8.125	15.812	11.968
15. Walter Glass, "	8.750	15.104	11.927
16. David Zogg, Suisse	10.625	13.187	11.906
17. Harald Panngarten, Autriche	12.750	10.938	11.834
18. Walter Buchberger, Tchécosl.	7.250	14.562	10.906
19. Hans Eidenbenz, Suisse	5.875	15.297	10.551
20. Virale Venzi, Italia	3.875	16.928	10.416
21. Gustav Müller, Allemagne	12.250	7.978	10.114
22. Alex Rozmus, Pologne	2.375	15.157	8.781
23. Martial Payot, France	3.750	12.042	7.806
24. Stanislaw Molyka, Pologne	4.250	10.812	7.521
25. Anders Haugen, U.S.A.	0.000	14.895	7.447
26. Charles Proctor, U.S.A.	0.000	14.417	7.203
27. Merritt Putman, Canada	0.000	9.706	4.353
28. Kiebert Blannat, France	0.250	8.333	4.291

優勝者は果してノルウエーの Gröttnsbraten であつた。十八軒で二〇點を得た彼は、ジャムブも一流に入る、當然の結果である。しかし彼は、矢張 Langlauf が強くて、Langlauf で點數をとつて、ジャムブでは現狀を維持すると言つた風の選手である。走る方では二〇點をとる事が出来るが、ジャムブでは二〇點をとる事は不可能だから、複合競技では Gröttnsbraten の様な選手は甚だ強いのである。彼の Sprung は諾威の選手の間では落ちる。外の選手が年若く、彼は頭が禿ける年であるせいがあるかも知れない。

いがサツツもノールウェー人の中では弱い。⑤⑥の操作もよくない。二等は矢張 Norway の Snesrud である。三等には芬蘭の Nuoto がシヤムプの成績で躍進し、四等は芬蘭の Järvinen、五等が瑞典の Eriksson で、此もシヤムプがよかつたのである。六等は走るのがよかつた。Vinjaren 七

等に初めて中歐の選手、獨逸の Beck があらはれる。一等の Grötem とは四點近く違ふ。八位はチエコの Nemecky、九位が瑞西の Adolf Rauh である。波蘭の Czech は十三位である。日本選手は二回とも轉倒したので成績にあらはれなかつた。

移 轉 廣 告

今般當會事務所ヲ六月一日ヨリ北二條西十五丁目

へ移轉仕リ候間御報知申上候

山とスキーの會

オリムピ
アーデの
スキージヤムプ競技を觀る

山
廣田戸七郎

私は今此處にウインターオリムピアーデのジヤムプ競技を見物したことを書かうと致して居りますが、その大會當日の競技の状況、そして、それで獲た感想もさること乍ら、私は、そのみでは不充分であると思ふて競技前の練習の頃からのことから書出して見たいと思ふ。

サンモリツツの冬は何故風が少いのであらう。それは周りが完全に山で取圍まれて居ると言ふことに大きな理由がある。真冬と言つても、あの寒い風が吹かないから割合にお天氣が良い。朝夕の氣温は平均零下七、八度か精々十度内外である。そして日中はと言ふと、日本の三月即ち春先きの様な暖かさで太陽が照りつけて居る。だからノンビリとした氣分でスキーを味ふことが出来る。それで居て雪が融け出さない。雪温が低い爲であらう。私達の一行も、そんな工合で殆んど寒いと思つたことはなかつた。

こんな工合であるから、スキー競技會も随分日本に比較すると容易に行ふことが出来るし、競技や山旅や、楽しんで苦しんだりする爲のスキーが、日本程吹雪を心配し乍ら、やる様なことは先づない。そして雪は良いし、景色は申分なく良い。だから瑞西の人達は冬に恵まれて居ると言つても良いと思ふ。

一冬に一度か二度の大吹雪が「崇りにも崇つたり」と言ひたい處でなからうか、折角待ちに待つたオリムピアーデにうなりを立て出したんだから。此度のオリムピアーデの開



Alf.Andersen / 飛躍振り

催團體であつたスウイスのウインタースポーツ團體のあの
オーガニゼイションには苦言を呈したい點も數々あつたで
あらうけれど、天候の不順だけには文句無しに「參つた」
と言ふより外なかつた。

各國選手達の練習振りを見る。

ドイツの連中は、もう一月の始めから、ポントレシイナ
にやつて來て合宿練習を續けて居た。私達がサンモリツツ
に着いたのが一月九日であつた。十五日の日曜日にそのポ
ントレシイナでジャムブの競技會があると言ふので、僕達
がサンモリツツに着くと間もなくポントレシイナのスキー
クラブから競技會に出ないかと勧誘された。で麻生君と伴
君と二人のジャムバアを參加させることにして申込んだ。
それも日が迫つて居たので電話で申込んでやつた。

そのポントレシイナの競技會の時に始めて、素張らしく
フツ飛んで行く大ジャムブを見た。その競技會は、まる
で端西とドイツ選手の對抗競技の様な格好であつた。と言
ふのは三十何人かの出場者の内、此二ヶ國外の選手と言ふ
のは仲間の麻生君と伊太利のベルナースコニイと言ふ選手
と二人切りであつたからである。

その競技會を見て、私達は實際驚ろかされたのであつた。
と言ふのは素張らしいスピードで空中を飛んで行くのと、
レコードが又とても大きいのと、そんなに遠くへ飛んで居
ても随分無雑作に飛んで居ることであつた。實際、此競技
會を見たばかりの當初の頃は、是が所謂理論的なスウイス
式の飛び方、ドイツ式の飛び方なんだわいと知つた様な次
第である。

兎に角「ドンナンダイ」と聞かれても、只素張しいジャ
ムブを見たよと言つて友に通信する外、言葉を知らなかつ
た位であつた。これなら今年のウインターオリムピアード
のジャムブも見物だと實際思つて居た。そのポントレシイ
ナの大會のことは他日に譲るとして、まづドイツの選手も
スウイスの選手もノールウエーの連中と良い勝負をやるで
あらうとは、その當時、私の頭に考へられて居た。

そしてドイツの選手達は、そのポントレシイナの大會後
サンモリツツドルフの大會の時にも、亦優秀な成績をあけ
て居た。お断りして置かねばならないが、ポントレシイナ
の村と言ふのはサンモリツツと一つの山を隔てて東にある
村で、スキーで歩いて行つて一時間位で行ける村である。

汽車なら十五分位でサンモリッツから行ける。

それ程近い位置にあるから、ドイツの選手達はサンモリッツで宿を設けずに、オリムピアードの濟む迄、ズーとそこで合宿練習して居た。でドイツの連中は、オリムピアシヤンツェへは、大會前に極く僅かしか練習に來なかつた。飛び方から言ふと、アブローチのスピードを利用して遠くへ行く行き方で、後で見たノールウエーの連中の踏み切りの強い飛び方とは可成りの徑庭があつたやうに思はれた。然し、五〇―六〇位は大抵の連中が鮮かに飛んで立つて居た。相當の處までドイツは喰込むだらうと容易に豫想が出來た。

スイスの選手達の競技會でのジャムプ振りを最初に見たのが、前述のポントレシイナの時であつた。名前だけでは已にトロヤニイとか、ウイルミイとかは知つて居たが、實は此ポントレシイナで始めてツク、彼等の顔を眺め、そして飛ぶのを見た。スイスの連中は未だ一月中旬過ぎまでは、オリムピアの正選手が決定しなかつたらしい。

ポントレシイナの競技會、サンモリッツドルフの競技會シユタートの競技會等で、愈々正選手が決定した様で、二月に入つてからサンモリッツの田舎で合宿を開始した様で

あつた。スイスのジャムプバアぢや、トロヤニイやウイルミイがとても呼聲が高かつた。取り分けトロヤニイの人氣は素張らしかつた。ノールウエーのタムスカトロヤニイかと言ふ位トロヤニイは多くの人達が望みをかけて居たやうであつた。尤もトロヤニイはポントレシイナの大會で七二米と言ふ驚異的なレコードを作つて居た。

然しシユワイツの選手達は、何故かドイツの選手達と一所の競技會では、何時も殆んどドイツの連中に勝を讓つて居た。そこには確かに原因があると思ふ。何れかと言へばシユワイツの連中は未だ、ムラがあるしドイツの連中は、其點から言ふとジツヘルである。

もう二月に入つてから各國の選手が殆んど顔を揃へてオリムピアシヤンツェにやつて來て練習を開始し始めた。フィンランドが來る、ノールウエーが來る、スウェデンが來る、オーストリー、チエツコ、フランス、アメリカ、キャナダ、ポーランド、イタリー等々續々とやつて來た。

丁度僕達が二月三日四日のクロステルスの競技會に出場する爲にクロステルスへ行つた時であつた。始めて、そこでノールウエーの連中の素晴らしい、本當のジャムプらしいジャ

ムブを見た。尤も其處の大會にはスウイス一流のトロヤニイとかウイルミイ、ゼツブ、ミュウルバウエル等は顔合せしなかつたが、然し、スウイスの一流處が相當來て居た。

ノールウエーの連中は殆んど皆んな居た。タムス、グロットムスブレーテン、シグムンドルード、コルテルード、ホルメン、アンデルセン、クレツベン、ウイニアレンゲン、スネルスルードなんて言ふ連中がズラリ名前を並べてプログラムに出て居る。

今此處ではクロステルスの競技に關したことは餘り書かない。兎に角、とても物凄く踏み切つて行くジャムブラしいジャムブ、体を樂に前にかけて、スキーを着陸の時に斜面と平行に持つて行つて着陸して行く鮮かさ、何れの部分を切つて見ても成程と、うなづかれる點ばかりであつた。

とうとうシグムンドルードはそのシャンツエンレコード五二米を破つて五七米を出した。もう、そこは平地まで一〇米もあるかなしである。傾斜は恐らく二十七度位であらう。アツサリと飛んで立つた。ブラボーは、しばしシャンツエの周りに鳴り渡つて居た。此處で始めてアブローチを長くとれば、そしてジャムブ台が大きければ、いくらでも

遠くへ行けると言つた様な考へ方の間違ひであることが判つた。何しろ同じい處からスタートして來てもノールウエーの連中と、スウイスの連中とは一〇米の開きが樂に見出されて居た。

オリムピアシャンツエへ行つてからも特にさう思つたがノールウエーの連中は實際他處の土地へ來て其土地の選手も随分押し居たやうであつたし、事實ノールウエーの連中には何處の國の連中も押され氣味に見えた。

何しろオリムピアシャンツエへ練習に行く時には純粹のジャムブの選手四人と複合競技出場の選手四人と都合八人が何時も揃つてやつて來るんだから他國の選手が押されるのも無理がない、そして大抵午前中に練習をやつて居た様であつたが、ノールウエーの連中の練習の時と言ふと見物人が大へん多い。と言ふのは何れもこれも素晴らしく勇敢に遠くへ飛んで、そして鮮かに立つからである。そしてコンバインドの連中でも純粹のジャムブの選手と大して見劣りがしないんだから實際抑へられざるを得ない。

とうとうオリムピアシャンツエで純粹のジャムブ出場の選手とコンバインドのジャムブ出場の選手を決定する競技ら

しいものをやつた。特にコルテルードは七十二米のレコードを出した。アブローチ八四米の最頂からスタートしたり、それより五米、一〇米下の中途からもスタートしたりして練習をして居たが、ノールウエーの連中がアブローチ六十五米遶りからスタートして六〇米以上飛ぶのに、頂上の八四米の處からスタートして來ても、他國の連中は五〇米台しか行けないんだから、話にならない譯である。フランスの連中やウンガールの連中なんか、よう五〇米のレコードを出し得なかつたやうであつた。

何しろ一本飛んで二本目を飛ぶのに、麓からスタートまで登るのが随分なアルバイトであるから、大抵一日に三本多くて四本位飛ぶ程度の練習を各國の選手はやつて居たやうであつた。ノールウエーの連中で四本飛んだ選手を見なかつたが、一本飛ぶと立つた時でも、よう休んで居ずに續け様に三本位を飛ぶ。それが若し轉んだり仕様ものなら、何も話もせずにグングンとスタートへ登つて行つて無難作に飛んで立つて居る。立つ積りで飛ぶのならノールウエー人には、少しも苦しみも、六ヶしさもなさ相であつた。ノールウエーの選手達が氣強いのは、ノールウエーから可

成り、たくさんのお應援團がサン・モリツツにやつて來て居て練習を見物に行つて力瘤を入れて居たことにも可成りよると思はれた。流石に丈夫相なへと言つても材木の感じのする様な部厚の日本式の様なものではないが、ノールウエーのジャムブのスキーを折つて居たやうであつた。大抵縦にヒビが入つて割れて居た。

旨いのはあるがスタイルの悪い故か見榮えのしないのがノールウエーに隣して居るスウェーデンの選手であつた。

今度のオリムピアードのスキーでは、随分ノールウエーを壓迫して居たスウェーデンが、見榮えのせぬスタイルをして居た故か、寫眞屋やへ行つても、スウェーデンの連中の寫眞が数少いと言つた様な譯で、實際氣の毒な位であつた。

決してジャムブのスタイルが悪いとか技術が下手いと言ふのでなくつて、服装が榮えないのであつた。何れかと言ふとノールウエーの連中は派手な方だし、スウェーデンの連中は地味な方であつた。ジャムブの方だけで言ふとノールウエーの連中の流儀に入れるべき飛び方であると思つた。

フィンランドはヤルヴィネンとノータイオとが光つて居たやうであるが、然し、オリムピアードでは未だノールウエー

の連中に壓され氣味であつた。

アメリカからは例のアンデルスハウゲンが高弟を連れてやつて來て居た。流石に圓熟なジャムブ振りを見せてゐた。

此他の國では名だけで知つて居たチエツコのブルケルトウイリイディックや、イタリイのヴェンチイなども相當に鮮かに飛んで居た。殊にヴェンチイは此處のオリムピアシヤンツエへ來てから一段と見榮えのするジャムブをして居た。体は空中で左肩前になつて傾いて居るけれど、その姿勢にとらはれずに、何處までも進んで、そして立つて居た。他の國の選手もさうであつたけれど、概して空中では体を伸ばすことを第一に、さうして斜に傾いても、前傾になり過ぎてても、大してそれを苦にして矯正しやうとする風が見えず、体が傾いて居れば、その儘何處までも体を持つて行つて立つと言ふ様に見えた。早く言へば自然に飛ぶ譯である。

此外にフランス、ユーゴスラビア、ポーランド、ウングール等の選手も毎日練習して居たけれど、日本の程度と大差なかつた。

技術方面の係長の役をして居たポントレシイナの郡長さんのワルテイさんが、毎日シヤンツエに顔を出して人夫を

指揮して居たのや、"Der Winter"で有名なルーター君がランドイングバーンで、しきりにストツプウオツチを握つてフライトのスピードを測つて居た。何秒位かゝつて六〇米迄行くかと聞いたたら三秒乃至四秒位だと言つて居た。

ノールウエースキークラブの會長さんのオステゴールドさんは、何時も選手を引き連れて練習を見に來て居た。

各國選手の練習振りから見ても、ノールウエーの堅城を突くものは、先づ旨く立つてスウイスのトロヤニイかドイツの連中か、スウエデンの連中でないかと言つた様なことが私の頭に浮んだ。

練習の時に見たのであるが、ノールウエーの連中でも何處の連中でも、とてもスキーを大切に取扱つて居る。特にノールウエーの連中は手入れを良くして居るやうである。スキーの表に雪をつけて居る様な者は一人も居ないし、スキーの裏を見るとピカ／＼に光らして居る。そして一回飛ぶと直ぐ雪を取去つてバラフィンでグン／＼塗つて居る。やがて五〇軒レースも過ぎて、その翌日の雨降りから、すつかりジャムビングヒルのコンデイションがそれ以前と一變して終つた。斜面は十五日以後使用禁止となつた。

北海道の春

伊藤秀五郎

北海道の自然といへば誰れもすぐに、曠漠たる平原や、鬱蒼たる森林や、開墾地や雪原や、或はまた荒涼たる海原などを想像するであらう。確かにそれらには、北海道でなければ見られない特色はある。けれども、もつと細い、極めて手近なところにも、私達はよく北海道の自然の特色を窺ふことが出来ると思ふ。夏から秋にかけて、いくたびか夜の札幌を襲つて来て、街燈を寒海に光る發光菌に變へて了ふ霧もその一つであるが、雪解の頃の土の色など、たしかにその一例である。その土の色といふのは、漸く長い根雪が解けて土の膚が、ところどころ露れてくる時分の、あの少しく、すんだ様な黒い色のことだ。それは全く北海道に特有な土の色である。峯は冷い雲に霏みぞれ、しかも谷間には、すで

に福壽草が膨らんでゐる時分、未だ平原を吹く風は寒く、手稻やまなこの山脈にも残雪が光つてゐる時分なのに、その土の色ばかりは長い間深い雪にやさしく育まれて來た様な柔い感じがする。

私が始めて、この土の色に氣がついたのは、五年前の五月の初め頃、澤から尾根へとわづかに残された雪を求めて、一日サンマー・スキーで、その邊の山を歩きまわつてから山裾の牧場の新鮮な牛乳で、渴いた咽を潤さうと思つて發寒川の上流の宮城澤といふのから、盤の澤の平へ下りて來る途中だつた。もうその邊はすっかり雪が解けて了つて、季節の風に最初の夏を約束する笹の群は、伸び返つて光つてゐた。そして風の風いだ山峽の畑には、農夫達が暖い午後

の光を浴びてゐた。

ふと、谷向ふの傾斜地のめづらしい土の色が、強く私の心を惹いた。私は立止つて、つくづくとその土の色に見入つた。上の方は未だ開墾されない草原に續いてゐて、ところどころ太い焼株が残つてゐる、その急な傾斜地の一角だけが、外とは全く別な土の色をしてゐる。暖い春の午後の陽光を吸ひながらも、陽炎にはあまりにも黒い土の色だ。而も私は、その土の色に限りない親しさを感じて了つた。

どうして私は、こんないゝ土の色に、それまで氣が付かなかつたのだらう。そうだ、それまで私は、土から、ぢかにくる力を知らなかつたのだ。土の色をみることはしないで、そこに芽ぐんだ緑ばかりを見てゐたのだ、嫩草が自然の春の象徴だとばかり思つてゐたのだ。

そのとき、はじめて私は、この濕り氣をもちながら、なほ無限の温味ぬくみをこめた土の色を通して、鬱勃として迫つてくる春を感じた。

それから私は、そこに蒔かれた蕎麥が伸びて、土の肌をかくして了ふ時分まで、いくたびかその傾斜地の黒い土の色を見る爲に、三角山の奥の小さな峠を越しては、小別澤

の方へ下りて行つた。私は草原に寝ころんで春の日射ひざしに、山蔭がその谷間をうづめる頃まで、その土の色を見た。

春が来ると毎年私は、ひとりその小さな峠を越える。

去年の春も、東京ではもう櫻が散つて了つた頃、札幌へ歸つて來た。三角山も未だ冬の姿で朝の日光に冷く輝いてゐたが、雪に被はれた平原のところ／＼に覗いてゐる、あの黒い土の色を汽車の窓から見て春だなと思つた。私は小兒の様に、何かしら心の高ぶるのを感じた。

一体北海道の平原ほど、平原といふ言葉の表す感じにびつたりするものはないと思ふ。北海道には平野はない平原である。そして内地には平原はない、どうしても平野といふ感じである。同じく曠漠たる平地であつても、内地と北海道とは、それだけの相違がある。原と野、といふ文字の表す感じの相違は、實際に十勝平原なり石狩平原なりと關東平野とを較べてみれば一見にして明かなことである。

そして北海道の平原は、また酷く索漠たるものである。殊に、全く綠色生物の粉飾をもたない雪解の頃の平原の風景は、まことに落漠たるものがある。そこに早春の陽光は射しても、未だその恵に浴すべき草木は芽立たない。微風の萌

芽は忽ち残寒の烈風に變つて了ふ。風雅もない、閑寂もない。勿論、遊子が一瓢を携ふべき花郷桃里などは存在しない。その風景は、寥々たる曠原の展開である。唯その寂寥たる景色の中に、ところ／＼覗いてゐるあの土の色ばかり

力強く春を象徴してゐるのだ。
私は嘗て、あの穏和な京濱の郊外の、麥の青さに感じたよりも、もつと力強い春を、雪解けの頃の北海道の土に感ずる。
(一九二八・四)

スキー使用語辯

T O S 生

つい先日、私は日本のスキー界で使用して居るスキー用語の大へん亂雑であるといふことを聞いたが、此事について私は一言申したいと思ふ。

元來外國から來たスポーツでは、今迄は割合に英語をとりに入れて、そしてそれを邦譯して居るものが多い様である。勿論私達は邦譯を望むことは切である。然し無理につける漢譯的單語は好ましく思はない。よく私達が言ひ合つて居ることであるが、まづい漢字の當字で譯をつける位なら外語の發音をそのまゝ片假名で書いた方が余程良いと思ふ。そして、その方が感じが出るし、氣分が出るのである。スキーを雪艇とか、雪橇なんて譯して見たつて、ちつとも感じが出ない。否、はやはりスキーで結構ぢやないか。

感じとか口調とかで片假名を私達は當てゝ讀んで居るからアプローチといふ英語讀みの言葉もあれば、サツツと言つたノールウエー語讀みの言葉もある。言葉が揃つて居ないと云ふことは、考へ様によつては良くないと云ふ人もあるかも知れないが、私達が何故そんな風にして使用して來たかと言ふに、そこには理窟もなければ六ヶ敷い苦心もないのである。たゞ私達は文句なしに感じて、いろ／＼の國々の言葉をその發音に従つてその儘片假名を當てゝ終つたゞけのことである。そして私達がそれを使つて居る間に、別に他の人達に勧めたり何かした譯ではないが、今では私達が使ひ出した言葉が殆んど日本的になつて終つたまでのことである。私達はそれが日本的になつたなら、その言葉を一つのテクニツクの日本の言葉にして終へば、それで充分ぢやないかと思ふ。

モボとかモガなんて言ふ言葉が、逆に英國で英語の辭書に書加へねばならぬと言ふ様な世の中である。何も頭をヒネツて六ヶ敷い漢字當ての呼び方をつける必要もないと思ふ。

山 詩 抄

和 辻 廣 樹

◇ 夏 の 調 べ

苔古りし岩のうへを
柔しくも流れははしり
鶯は針葉樹の森に
たのしきうたを唄ふ。

小川の流と鶯のうたは
我に愛らしのものを示し、なほ
莊嚴かに鐘の音ひびく
われ、これよりよき賞讃^{ほめこゝ}を知らず。

夏の装ひのなかに
牧場は廣く輝ける輪と亂れ

ひとつのうましき顔は
なほ我が傍より晴れ晴れと笑ふ。

鶯はその唱を止め
流はしづまる、静けき平和
鐘の響と太陽の光の
我れ囚れの身となりぬ。

◇ 山 に て

我が心安らけくよろこばし
齢は老をかぞへたれど
而もなほ若者となりて

—プロスツァート—

山よ汝の姿をみる。

汝の透徹る緑の國にては

悲嘆と勞苦は消へ去るべく

此處、滿てるよろこびのうち

噫、我は覺ゆ、神に似たるを。

— エー・ドゥレーヤー —

◇ ハイデクラウトのなかに

我れ崖の上高く

ハイデクラウトのさなかに立てり、

暗らき森のうへ高く

太陽光きらめく崖の上高く。

涯知らぬ海上を

漂ふをおもふ我が想ひ、

その波の戯れは

輝しき青色の空、

高き頂より吹きおろす

氣儘なる山風の絶え間なき私語と響、

かぶと蟲の羽の音、

風に揺れかぶ梢のさはがしさ

輝く光、静けき滑るがごと流るゝ光

波うてる色、

森を流るゝ水の淡白き閃と轟、

なほ我が想ひ

我が愚しの想ひ、

暖き榮光の流れもて

自然は我が魂の底深くうた唄ふ

神秘なる、かなしくもやさしきうたを。

遠く灰色の谷を越へ

遙か彼方陽に映えし世界を越へ

我が憧憬は話かくる、

汝、愛しものよ、解く術もなき一つの謎よ

汝は邪念なき私語もて

湧れくる大地の力もて戯るゝ、

汝、一つの謎よ、

解く術もなき一つの心よ……。

我れ

ハイデクラウトを我が帽子にさしぬ

して我れは彷徨ふ

我が行方はいづこ、

小鳥の鼓翼はたは

遙かあしもとより聞えきたる

鐘の音のごとく晴れやかに……。

— ジョアネス・シユラーフ —

◇山のなか

おゝ、美味き大氣

おゝ、したはしき香

鐘は鳴りわたり

鳥はうたふ。

我は家をあとに

いざ行かん、行かん。

溪谷の彼方には

喧騒に加ふるに憂愁。

山は眼もて微笑み

また閃きはたかし。

いざ我こそは懸命に

登らん、登らん。

香床しき高峰の花

そは我をば高くも引よする。

裕々と鶯は黙して

舞ひ昇る。

而して我が魂は奮れぬ。

いざ高きへ、高きへ。

— カール・レインリッヒ —

◇白樺の木

我れその日をよく覺えたり

そは今日にも似たるやさしき

やはらかき五月のはじめつ方

日光ひかりに満ちし朝あしたのながめは

目覺めし我がまなこを

こよなく喜ばせしを。

たのしきまなこをあちこちと馳せ

そのまなこは如何ばかり多くの

春の寶をあつめしことよ。

あまたたなびく花雲のなかに

幼子の一人は佇みて

花片らを小さき膝につみて居し。

その時我は路の傍すれ〜に

ひともの白樺の木

早咲の梅に混りて只ひとり

淋しくも立てるをみたり、

如何なるか我れは事情もなく

その傍を過ぎては通れざりき。

白樺の影のなかにしばし立ち

彼の女のやさしき幹を

我はかたく抱きしものを、

また彼の女の冷き木膚に

我が頬を

静かにおしつけしものを。

そよかせの柔く彼の女を揺り

小さき木の葉は

媚をうる小女の手のごとく動き

一つの振ひの傳りき

噫、白樺の木

戀初めしを知りたるがごとく。

しかり

すぎし方より戀の憧憬はありしなり

此處に彼の女は靜に一人立ちてゐたり

そはあだかも路の畔にて

一つの魂の

我が心の底深く傳へられしごとく。

—グスター・ファルケー—

◇山のうへ

我等、山上に住めり

高く、自由に、

我等の足もと低く

人の世は喧騒を忍べり。

霧の谷間へ沈むが如く

すべての惱みは

はるか下方

墳墓のなかへと沈みゆく。

—アルブレヒト—

第十六シーズンの北大スキー部々報

五月廿七日 午後六時より學生集會所にて最初の幹事會開催各役

劃を決定す。

六月三日 午後七時學生集會所にてスキー活動寫眞映寫會。盛

一員二會。スキーテクニク、スキーの世界より、シーハイル、

雪の樂園の順序で映寫。

六月九日 午後六時半より小川玄一氏宅にて幹事會開催。

午後九時の汽車にて宮下利三君全日本スキー聯盟代表委

員會に出席の爲出發。

八月九日 木原先輩來札

八月十一日 午後六時有合亭にて木原氏歡迎會

オリソニック選手決定の來電あり。我部より岡村、伴、

廣田の三君及早大より高橋、矢澤、竹節の三名、都合六

名。岡村源太郎君病を得て北大中川内科に入院。

九月十六日 夜中野氏宅にて派遣選手寄附金募集實行委員會開く

九月十九日 夜スキー部幹事會

十月十五日 午前五時半岡村源太郎君死去。婦人科醫局にて相談

十一月十一日 スキー部々報となす事に決定。

十月十六日 午後二時半より醫學部學生會館にて故岡村源太郎氏

の葬儀(神式)四時終了

十月廿四日 岩崎直砥先輩及緒方直光先輩來札

十月廿五日 午後六時半より有合亭にて岩崎、緒方兩先輩の歡迎

會開催。

十月廿八日 六時半より「山とスキー」にて幹事會開催本年度計畫

を定む。

十一月一日 午後六時半より學生集會所にて新入部員歡迎會開催

寫眞映寫、仲々の盛會。

十一月七日 インターカレッジ代表委員會出席の爲伴素彦君札

を出發。

十一月十、十一日 學生集會所にてスキー及スキー靴取次をなす。

十一月十五、十六日 三友館にて派遣選手後援會主催スキー映寫及

植有恒氏講演會あり。

十一月廿八日 派遣選手壯行會を學生集會所で開催す。

十二月二日 文武會主催兩氏壯行會於中央講堂

十二月四日 午後幹事會、冬季合宿の事を相談

午後九時廣田、伴出發。華かなる事夥し

十二月七日 午後九時高橋君の出發を見送る。

- 十二月十日 正午、學生集會所にてスキー引渡し
 同 十一日 夜山とスキーにて幹事會
 同 廿二日 午後一時半より合宿打合會開催
 同 廿三日 午前七時半の汽車にて昆布行き合宿第一日
 同 廿四日 第三日、二班三班吹雪の爲ニセコの中腹より歸る。
 同 廿五日 第四日吹雪、第二、第三班チセの頂上を極む。第一
 同 廿六日 第五日吹雪、第二、第三班ニセコに登る。凍傷二人
 同 廿七日 第六日、ケレンデにて練習
 同 廿八日 第七日晴天、部長始め有志ニセコの頂上を極む。
 同 廿九日 午前十時合宿引上、札幌着五時半
 一月二日 手稲山初登リデスタンスレースの合宿を圓山に始む
 同 六日 インターカレラ大鰐遠征の途に上る。
 同 七日 午後四時大鰐着
 同 八日 十三日 練習
 同 十四日 試合第一日
 同 十五日 同 第二日
 同 十六日 同 第三日、夜大鰐を引き上ぐ。
 同 十七日 午後五時札幌着、學生集會所慰勞會
 一月十八日 圓山合宿開始
 同 廿一日 北海道豫選第一日、宮下、奥井入選

- 一月廿二日 北海道豫選第二日、夜インターカレラ視勝會
 同 廿五日 緒方温光先輩來札
 同 廿九日 夜「山とスキー」にて幹事會、モノグラム推選
 二月三日 木原、加納兩先輩來札
 同 四日 全日本スキー選手権大會第一日長田、中村、宮下、
 山田入賞
 同 五日 第二日、神澤、杉村、村木入賞
 夜視勝會盛大に行はる。
 同 九日 野付牛スキー倶楽部のコーチに伊藤健夫君を派遣す
 同 廿一日 秩父宮殿下札幌御着
 同 廿一日より十六シーズン終まで八〇號所載





SKI HEIL

スキ一
ト

其用與全般

中野商店

スキ一即ハ

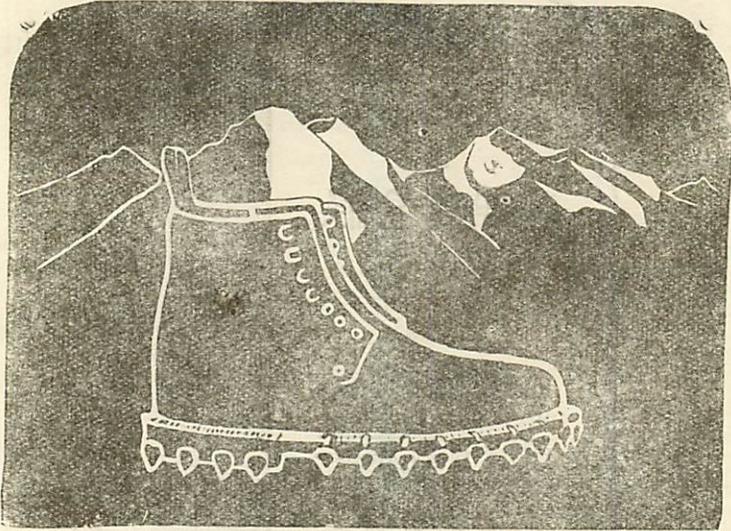
第一 雙
產 製 大
斯

札幌



標商銀皇

テ於ニ會覽博藝工産畜回二第
領受牌金賞等一



靴一キスと靴山登

角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四小話電

番七二一六京東替振

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されることを願ひます又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六册分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和三年五月廿八日印刷
昭和三年六月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 井 出 英 次

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十五丁目

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo
No. 82. Junio 1928. Sapporo. Japanujo.

春・夏・冬山の道具!

テント・ザイル・ラテルネ

夏スキー・リュックザック・等・等



合名會社 美滿津商店 東京・本郷前
東赤門

電話(小石川) 八四五・二〇七一

大正三年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和三年五月二十八日印刷
昭和三年六月一日發行

山とスキー

第八十二號

定價金參拾錢